

令和4年度（2022年度）第1回南北海道定住自立圏共生ビジョン懇談会
議事録（要旨）

日時：令和4年11月16日（水）14：00～16：00

場所：函館アリーナ 多目的会議室A

（14:00 開会）

<挨拶>

（高橋国際・地域交流課長） 新型コロナウイルス感染症の影響により、ここ数年は書面開催という形で開催していたが、再び対面による開催ができ嬉しく思っている。

定住自立圏構想は、中心市と近隣市町村が役割分担をしながら連携し、地域における共通の課題の解決や産業振興などに取り組むことを目的として平成21年に国が創設した制度で、本圏域では、函館市が中心市となり、平成26年3月に渡島・檜山管内の17市町と1対1の協定を締結している。

協定に基づき平成26年9月に5か年を計画期間とする第1次共生ビジョンを、その後、平成31年に第二次共生ビジョンを策定し今年で4年目となる。

本日の懇談会は、今年5月に新体制となって初めての懇談会となる。委員の皆様には、幅広い観点から闊達な議論を期待している。

この道南エリアが、将来にわたり安心して住み続けられるエリアとなるよう、今後とも皆様のお力添えを賜りたい。

<委員等紹介>

（事務局） 委員、オブザーバー、連携市町出席者、事務局を紹介

<座長・副座長選出>

委員の互選により、座長に古地委員、座長の指名により、副座長に井口委員が選出された。

<議 事>

【議題1】 事務局より資料に基づき説明

（意見・質問等 なし）

【議題2】 事務局より資料に基づき説明

（古地座長） 新型コロナウイルス感染症の影響により、当初想定していたような数値が出ていない、今後の数値が読み難いということはあるが、意見を伺いたい。

（永澤委員） 「二次救急医療体制の確保・維持」の指標は、新型コロナウイルス感染症の影響や大学病院から派遣の医者の問題など色々あるので、病院の数ではなく、夜間急病センターと同

様、「365日開設」という指標の方が目標値としていいと思う。

(古地座長) 二次救急医療体制を確保・維持するため何が必要かということだが、365日開いているという方が指標としては重要ではないかと思う。

「結びつきやネットワークの強化」の「地域内外の住民との交流・移住の促進」の中で、外国人住民の人数が指標となっており、圏域として外国人住民を増やす方向に動いていくというように見えるが、事務局ではその点議論しているのか。

(高橋国際・地域交流課長) ビジョンには、外国人の受入体制の充実を図るという基本目標のもと推進している事業を記載している。指標として、「留学」の人数を記載しているが、受入体制の整備という軸に対する評価の項目として設定しているもので、事業自体は、「留学」の人数を増やすというものではなく、外国人の受入体制を整備するというものである。事業名に適した指標なのかという点については、委員の意見を踏まえながら、新たに検討していくことも必要であると考えている。

(古地座長) 外国から来た方々の力をどのように借りていくのか、ということも踏まえて指標を考えていくと、色々なところにつながっていくのではないかと思う。

(永澤委員) 「脳疾患救急搬送体制」に関する指標も、「365日開設」という指標でいいのではないかと思う。

【議題3】 事務局より資料に基づき説明

(古地座長) 事務局からの説明に対し意見を伺いたい。

(孔委員) 提案が2点ある。まず、「圏域における国際化の推進」の中に、「留学生等受入体制の整備」という事業がある。留学生等には、技能実習生や特定技能外国人労働者の人数が含まれることは承知している。技能実習生等の方が圧倒的に人数が多く、今後も増加すると思われるので、指標にはこれらの人数を含めることを検討いただきたい。

また、技能実習生等は、水産加工業や福祉施設などの労働現場を底辺から支えているので、外国人労働者の受入拡大というような形で項目を追加できないか。「圏域における国際化の推進」の中でも構わないが、「産業振興」の分野でも構わない。技能実習生等は、帰国後も販路拡大や現地投資など日本の経済をサポートし続ける存在となり得るので、支援が必要と思っている。

(古地座長) 第三次ビジョンに向け、留学生だけではなく、技能実習生や特定技能外国人、更には在住外国人から選ばれる圏域になるためにはどうすべきかということも含めて話をしていればと考えている。

こうした議論を委員の皆様としていきたいので、残りの時間を使い、第三次ビジョンに向けた忌憚のない意見を伺いたい。いただいた意見を今後行政を含め一緒に考えていくための材料

にしたい。

現行ビジョンに記載されている圏域の将来像や「安心と交流でつながる南北海道」というビジョン、これらをそのまま維持するのか、変えていくのか。維持するのであれば、今までと同じでよいのかということも考えていく必要がある。

将来像を実現するために、この圏域で、官民で何をやるのかという話になってくる。

北海道新幹線の札幌延伸がこの圏域にどのような意味をもたらすのか。観光客だけでなく、二次交通や地域住民の交通というものをどのように考えるのか。各自治体も色々取り組んでいるが、各市町が連携して行った方がよいという視点から考えていければ。このようなことを考えながら来年度色々議論していきたいので、それぞれの立場から意見を伺っていきたい。

(永澤委員) 2点、提案がある。1点目は、平成29年に函館市と医師会で「函館市医療・介護連携支援センター」を立ち上げ色々取り組んできた。昨年7月には、北斗市および七飯町と連携協定を締結し、「ほくと・ななえ医療・介護連携支援センター」を立ち上げた。医師会では、医療と福祉、医療と介護の壁をなくすということを目指しているため、各町においても検討いただけるとありがたい。

2点目として、令和2年度に、「函館市医師会看護・リハビリテーション学院」を設立した。非常に順調にっており、来年の3月に第1期生が卒業する。今後数年は、医療機関や介護施設に理学療法士・作業療法士を輩出することができるが、いずれ飽和状態になると思われる。函館市だけでなく北海道からも支援いただいているので、渡島檜山管内にも人材を供給したいという思いを持っている。また、新しい分野への進出も考えており、医療と農業の連携、スポーツ団体や観光等々との連携、高齢者・障がい者への支援など、リハビリスタッフがいることで色々な将来構想が見えてくると思っている。医師会だけでは難しいので、自治体にも検討していただくと道南圏が一丸となって医療福祉を支えていけるのではないかと考えているので、可能であれば、第三次ビジョンに組み入れていただくとありがたい。

(古地座長) 医療介護連携支援センターの取組みが、日本でも珍しい、全国に誇れる取組みというのであれば、この圏域のブランド化にもつながっていくと思う。

理学療法士等に関しては、圏域の市町に派遣されることで、それぞれの地域で自己実現できるように、ライフプランが描けるようになると思う。このように、総合的な視点で今後考えていけるとよい。次に産業振興の分野で赤塚委員の意見を伺いたい。

(赤塚委員) 北海道新幹線の札幌延伸により、長万部は、道南の出口・北の入口になるという感覚がある。胆振地方が近く非常に広域的になると感じている。今後の長万部は、ハブの役割を担い、より重要な地域になっていくと考えている。

一方では、函館・長万部間の交通の問題があり、函館の病院に通う方も多く、函館までのアクセスがどうなるのかという問題もあるので、新幹線が来ることで、観光客が増える、景気がよくなるという話もあるが、地域住民はどうなるのかということも併せて考えていかなければならない。

(古地座長) 今の話は「交通ネットワークの整備による域内移動の容易性の確保」ということになるが、ある意味、新幹線の延伸により更なる課題を突き付けられるということでもあり、今後、どのように考えていくかが重要である。

(孔委員) シンガポール在住の友人が毎年函館を訪れている。その友人は、「函館は2日目に何をすればよいのか分からない場合が多いので、例えば、観光客向けのコミュニティバスや1泊2日の観光コース等が掲載された観光マップがあればよいのに」と言っている。

コミュニティバスに関しては、他都市で先進事例があり、その都市では、技能実習生等の外国人労働者が1回100円で、その差額は自治体がバス会社に補助するというをやっており、外国人労働者はバスに乗り市内を自由に行き来している。このように、行政と民間が連携し、観光客の誘致を含めた外国人を受け入れる方策を検討できればと考えている。

函館は、外国文化を最初に受け入れた地域であるため、異文化を受け入れる素地があり、民間の活動も活発なため、ネットワークを作るうえで函館市が中心となって呼び掛けていくことで色々なネットワークが作れるのではないかと考えている。

(古地座長) 交通の話が出たので、地域公共交通の観点から伺いたい。

(渡部委員) あらゆる方に観光を楽しんでいただくため、観光エリアのバスを用意しているが、外国人をターゲットとした専門のバスを用意するというところまではできていない。

観光路線は数字も上がってきているが、サービスのいえば、少し周知が足りない、使用言語が日本語のみとなっているなど、外国人からは分かりづらい点があるかもしれないので、検討していきたい。

また、生活路線として地域の隅々にまで手が届くということが大事だと認識しているが、民間だけでは立ち行かない部分があるのが実情である。今後はバスのみならず地域の交通連携で地域を守っていくことが大事であり、ビジョンのキーワードとなっている、つながるということが大事だと思っている。交通が来る、安心を担保できる、乗ることで交流ができる、結果、つながるといった形に将来なっていけるように、将来のことについても議論を重ねていきたいと考えている。

(古地座長) 産業振興を含めて松本委員にご意見を伺いたい。

(松本委員) この懇談会では、生産年齢人口の減少という言葉が出てくるが、高齢化という言葉とセットで使われている。これまでの意見を伺っていると、2つの言葉は異なり生産年齢人口減少は克服する材料があるのではないのかと感じた。

また、南北海道定住自立圏成立の経緯から、事業としては、医療や福祉の分野が先に走っていたが、第1次産業の地域であり、これからは、函館圏として、函館市が前面に立って、圏域内の農畜産物や水産物などを売り込んでいけるようになると、素晴らしい構想になるのではないと思う。

新幹線の活用というのは今後大きなポイントとなるが、観光客を受け入れる施設等がコロナ

禍でかなり疲弊しているということがあるので非常に難しいと思っている。

指標に関しては、「生活バスの路線の維持・確保」で、路線バスの利用者の減少より人口の減少の方が大きいので目標値は達成しているということで、函館バスさんは非常に頑張っていると思う。しかし、人口をどうするという指標がない中、人口で割り返すと、すでにある政策と合わず構想の目標からも外れることになる。単にバスの利用者数の増減とするか、様々な圏域内の取組みによる利用者といった形の方が分かりやすい指標になるのではないかと思う。また、建設業は各地域において1つの柱となっているので、期成会の数、要望の回数という指標だと少し分かりにくいのではないかと思う。

(古地座長) この指標でいいのか、なぜこの指標なのかという話は、今後議論していかなければならないと考えている。

地域をつないでいくという話があったので、離島である奥尻町の場合、つながる、安心、交流というものをどのように考えているのかということ伺いたい。

(井口委員) 北海道新幹線開業時に観光客の増加を見込んでいたが、実際はそれほどでもなかった。奥尻島は、道央圏からの観光客が多いので、延伸により駅ができる長万部から奥尻に来るという形で観光客が増えると期待はしているが、フェリーの「せたな航路」の運休が非常にマイナスとなっている。

また、若松ふ頭の整備により、函館市は大型客船の寄港が増えると思うので、函館市だけではなく、近郊市町+奥尻島といった人の流れができることを期待している。

(古地座長) 各委員から新幹線の話が出ているが、新幹線を第三次ビジョンの中でどう扱うのかというところはキーになってくると思う。新幹線の駅がある木古内町の品田委員の意見はどうか。

(品田委員) 今年できたバイパスにより函館空港との距離感が非常に短縮された。新幹線も1つの交通手段ではあるが、やはり飛行機もなくてはならないものであると思う。

新幹線の効果については、入込数では、開業当初は効果があったが、コロナ禍の影響もあり、今はそれほどでもないと感じている。

広域観光の話では、観光ネットワーク・交通ネットワークや観光ルートの話があったが、今後は、宿泊を伸ばす提案といったものを広域的に考えていき、ビジョンの中に含めていけばよいと思っている。

また、「販路開拓支援」の指標が回数となっているが、「参加した企業数」や「販売額」といった指標の方が効果が見えやすいのではないかと思う。

(古地座長) 回数を指標にしている事業が複数あるが、回数はアウトプットであり、その結果何が起きたのかという成果がより重要である。その点も含めて今後検討できればと思う。「販売開拓支援」の話が出たので、山田委員の話も伺いたい。

(山田委員)「物産展フェアの開催回数」というものがどのように算出されているのかわからない。実際物産協会が携わっている物産展は全国約130回以上ある。物産協会を通しているところ、通していないところもあるので、正確な数字はつかめていないのが現状である。

(古地座長) データが正確に取れているのかということは、改めて考える必要がある。数字があればいいという訳ではなく、かといって正確性を期すため負担が大きい指標も使い勝手が悪い。効果が見えやすく、かつコストがかからない指標を選んでいくことも大事である。

先ほど永澤委員より医療と福祉の連携といった話があったが、福祉に携わっている浜谷委員から見て、今後どのように考えていけばよいのか伺いたい。

(浜谷委員) 医療介護連携の話は北斗市の方からも聞いており、確かな連携という意味でも大変よい取組みであると思う。

障がい者福祉という観点では、北斗市内に特別支援学校があり、クリーニング・福祉サービスの2つのコースがあり日々実習している。一般企業への就職が最終目標であり、そのために企業実習が課されているが、受入企業が少ないというのが学校の懸案事項となっている。複数の市町が連携して企業に働きかけるというのも、予算を使わないでできる取組みだと思っている。

(古地座長) 「確かな連携」というキーワードは結構重要ではないかと思う。規模は小さくても、「確かな連携」を築くことで地域の持続可能性を確保していくというのは、まさに人口が減っていく中で考えていかなければならないことだと思う。この地域で素晴らしいことが行われているということを改めて見直しながら、他の分野にどう広げていけるのかということを考えていければよい。

障がい者福祉の視点も非常に大事で、人の絶対数が減っていく中で、これまで地域であまり活躍できなかった方々が、地域の中で活躍いただくことを通じて、それぞれの立場で自己実現していただくという考えも重要だと思う。

今川委員にも意見を伺いたい。

(今川委員) 大沼に移住されている方の仕事の大部分は自営業である。企業誘致することで人も一緒に移ってくる、また、地元で仕事の量が増えると人も増えると言われている。協会としても、商談会などを通じて色々な企業に声掛けし企業誘致を進めている。企業誘致の感触としては、実際の反応は中々もらえるものではないが、実際に大沼に来て現場を見ていただいている企業も何社かある。

(古地座長) 今の雇用の話は、先ほどの生産年齢人口の話となるが、生産年齢人口に関する指標がないのが現状である。日本国内では、人口に関する目標を設定するというのはほとんど見られないが、この圏域を維持するための人口とその中で年齢別割合をどう考えるのかというのが生産年齢人口の話なので、技能実習生等や障がい者の方々に活躍いただくということは、ある意味で生産年齢人口の確保だと思う。

人口を目標に掲げるというのは非常に野心的だが、様々な分野の方々が共通の規模感を持っていないと各分野でバラバラになってしまう可能性があるので、第三次ビジョンについて検討する中で考えていきたいと思っている。

企業誘致、起業家誘致は、各自治体で色々やっていると思うが、外から見て起業家が来なくなる地域なのかということも考えていく必要がある。

委員の皆様から貴重な意見をいただいたので、来年度に向けての糧にしていければいいと考えている。

(事務局) 皆様大変長時間お疲れ様でございました。以上をもちまして、令和4年度第1回北海道定住自立圏共生ビジョン懇談会を終了します。本日は誠にありがとうございました。

(16:00 閉会)

出席委員	11名
欠席委員	1名
傍聴者	なし